




博士学位論文審査結果報告書

2004年 2月 26日

学位申請者	趙 華敏	
審査委員	主査	村木 新次郎 
	副査	寺川 眞知夫 
	副査	門前 正彦 

この論文は、反論を学問的にとりあげたものとして最初の論考かと思われる。反論という言語行動の基本構造を構築し、反論の諸形式、反論が展開されるプロセス、反論という言語行為の効力などに言及し、それに関与する諸条件を整理し、それらの相互の関係を明確にした点は、高く評価できる。単に反論という発話行為にとどまらず、他の発話行為の研究にも寄与できる要素をそなえているし、日中両言語の反論を比較し、その異同を提示していて、言語類型論にも貢献できる好論文であると判断する。




論文は、全体の構成においても確固たる形式を整えている。専門用語の使い方も妥当で、論文の鍵となる術語やさまざまな用法で使われている用語については、その都度、筆者なりの定義づけが施されている。

この論文には、欧米の研究者だけではなく、日本や中国の語用論をはじめ社会言語学などの研究成果に言及されているが、単なる紹介におわらず、また反論への単純なひきうつしでもなく、それぞれの成果を咀嚼したうえで、批判的にみずからの研究対象にとりこみ、日本語や中国語の有り様を直視して、そこから発話の中に潜んでいる法則性を導きだしている点が、この論文の優れたところである。

よって、本論文は、博士（日本語日本文化）（同志社女子大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認める。

博士學位論文内容要旨

2004年 2月 26日

学位申請者	趙 華敏	
審査委員	主査	村木 新次郎 
	副査	寺川 眞知夫 
	副査	門前 正彦 
(要旨)		
<p>この論文は、語用論、関連性理論、ポライトネス理論といった分野の観点から、7章に分けて現代日本語と中国語における反論という言語行為を考察したものである。</p> <p>第1章は、言語行為理論の形成と発展を概観し、本研究の理論的な根幹を示していると同時に、先行研究の問題点を指摘し、以下のような方向付けをしたものである。</p> <ol style="list-style-type: none">1) 遂行動詞という枠組みを無視し、「何かを言うことによって何かをする」という言語行為の根本的なところを徹底させている。2) 発話の意味は話し手と聞き手の相互交渉から生み出される立場に立ち、話し手と聞き手が参加するテキストを分析の対象とする方針を決めている。3) 従来の言語行為理論を根幹に、近年の研究成果を積極的に取り入れ、言語行為の分析に大いに役立てようという姿勢を示している。 <p>第2章は、「(A≠B)、C→」式、即ち、否定を前提に反論するというのを基準に用例を収集し、切り出しの部分を中心に、反論という言語行為を1.「前置きの導入」、2.「対立した立場の導入」、3.「他者の言葉の導入」、4.「間接的な言い回しの導入」、5.「否定的表現の導入」、6.「弁明の導入」、7.「疑問形式の導入」、8.「遮断する意志の導入」という8つの形式に分類、整理し、更に「正面衝突回避型」と「正面衝突型」に大別している。そして、反論は複合的な発話行為であることを指摘し、その上で、反論という言語行為を次のように定義づけている。</p> <ol style="list-style-type: none">i 否定を前提にする。その否定のスコープは相手の命題全体に及ぶ。ii 否定そのものは形式的な否定から、意味的な否定まで含まれる。しかも、潜在の場合がある。iii 否定に後続するCにより、相手に対する反論を展開させる。 <p>この3点は特に形式の面から反論という言語行為に対する記述であり、さらに、反論という言語行為の効力の構成規則を次のように作り出している。</p> <p>命題内容条件 話し手は先方の命題に反する命題を持っている</p> <p>準備条件 ①話し手は自分の命題が十分先方のと対抗できると信じている ②先方は議論する力を十分持っている</p> <p>誠実性条件 話し手は自分が持つ命題が正しく、自分ないし先方にとって益になると思っている</p> <p>本質条件 先方に自分の意見に同意し、或いは正当性を認めてもらう</p> <p>形式上 i ~ iiiの規定に則っていると同時に、この「効力の構成規則」に合った行為が反論という言語行為になると決めている。そこで、同一のコンテキストに話し手と聞き手がいて、話し手が自分の命題で以って、聞き手が持つ命題にぶつけていく。このプロセスにおける話者交代は1回限りのものもあれば、数回繰り返されるものもある、というような反論の基本構造が決まってくるのである。</p>		

第3章は、社会言語学と語用論の接点から、反論という言語行為が依存するコンテキストの最小限度の必須要素を目的、状況、参加者関係、力関係と決めている。こういった諸変数の変化によって、「正面衝突回避型」、あるいは「正面衝突型」の行為が選択されていく。

一口に「正面衝突回避型」、あるいは「正面衝突型」と言っても、諸形式別の管轄下にストラテジーがあって、聞き手のフェイスを脅かす危険が伴う反論という言語行為が円滑に行なわれるように機能する。このような反論に使われるストラテジーを21にまとめている。例えば、「前置きの導入」と言っても、導入の方法としては、①聞き手の命題を肯定、賞賛する。②自分の非を指摘しておく。③自分の態度、立場を説明しておく、と示したように、反論の諸形式とコンテキストの相関関係に応じて選択されていく。

第4章は、これまで各側面から見てきた反論という言語行為を1つの過程において、そのプロセスをたどり、モデル化しようと試みている。

まず、諸形式の反論という言語行為を標識の有無を基準に分類し、有標の行為を「マーカース式」、無標の行為を「アンマーカース式」とそれぞれ名づけている。「アンマーカース式」を更に「準無標」と「無標」とに分けている。

「マーカース式」の行為には「前置き表現」、「否定表現」、「遮断表現」、「接続表現」が含まれる。この4種類の表現はいずれ反論の「 $A \neq B$ 」の部分にあたり、否定という前提の顕在的な形とみなしている。この種の反論を「マーカース式」のようにモデル化している。

「準無標」については談話分析に用いられる整合性と結束性の概念を導入した。観察した結果、「マーカース式」のように、マーカースに当たる部分は発話の冒頭に来るのでなく、発話の内部にあり、相手の発話と照応関係や対立した関係でつながりを持たせることを言う。このタイプの行為を「準マーカース式」のように示した。「無標」は聞き手の発話との関連が形として表れないタイプの行為を言う。主として、「間接的な言い回しの導入」を利用して、反論という行為を行うようにすることを言う。このタイプの行為について特に次の点を強調している。

- 1) 含意を利用するタイプは主に示唆、ほのめかし、認知科学、関連性理論に負うところが大きい。
- 2) 推意を利用するタイプは推意のプロセスをたどる。

聞き手は相手の発話の中から「文脈効果が高い」もの、或いは「処理に労力がかからない」ものが得られて、意味解釈をする。

そして、「アンマーカース式」のようにモデル化した。「アンマーカース式」の反論では、否定の部分が潜在的になっていて、「 $(A \neq B), C \rightarrow$ 」の「 C 」の部分だけで表れるのが特徴である。

このように、反論という言語行為をモデル化することによって、一見、多種多様に見える形式の行為を有機的に1つのプロセスに収めている。

第5章は、近年ますます注目されるようになったポライトネス理論の立場から反論という言語行為を観察している。まず、「円滑な人間関係を確立、維持し、コンテキストに応じて発する適切な言語行為」がポライトネスと強調している。それから、先行研究を踏まえた上で、違う形式の反論がどれくらい聞き手のフェイスを脅かすのかを見積もる公式を次のようにとらえる。

$$W_x = S (P_u, P_r) + D (S, H) + P (H, P) + R_x$$

「社会的距離 D 」、「聞き手の話し手にかかる力 P 」、「ある特定の文化である行為の聞き手にかかる負荷度の絶対的順位に基く重み R 」以外に、「公私的な場面の相違によって行為の選択を決定する状況 S 」を追加するように提案した。それに、文化的背景の異同によって、「ある特定の文化である行為の聞き手にかかる負荷度の絶対的順位に基く重み R 」が用いられたり、用いられなかったりすることを強調している。

最後にフェイス侵害度合いをどのように軽減するかについて、反論の諸形式を「反論のポライトネス・ストラテジー」に納入させ、「反論のポライトネス・ストラテジーの分布」を図解する。

第6章は、中国語の四作品に出た反論の用例を中心に、日中両言語における反論という言語行為について比較する。その結果は次のようにまとめている。

1) 言語における反論という言語行為の基本的な類型には目立った相違はないが、下位分類に相違がある。日本語の反論に使われるマーカ―は中国語より多い。中国語では「呼称＋反論」、「聞き返した上で詰問する」形式が多用される。

2) 両言語において、具体的なストラテジーの選択に大きな違いがある。

3) 違う言語のポライトネスを判断する基準として、「適切さ」を提案する。

第7章は、この研究で得られた結論をまとめあわせ、今後の課題について述べている。

著者がいう未解決の問題と今後の課題は以下の通りである。

1) 反論は複合的な言語行為であるが、現時点の段階では切り出しの部分にだけ焦点をしぼり、後続する部分の範囲をもっと広げて考察する必要がある。

2) 反論の形式から、語用的機能、ストラテジーの運用等々に、どのような変化が生じるかは今後の研究を待つ必要がある。




3) 反論という言語行為を分析するには学際的な理論の支持が必要である。語用論、社会言語学、論理学、修辞学、認知言語学などの理論、弁証法的な立場、ディバードのテクニックなどの知識が必要となる。筆者の研究は語用論の理論が中心であるが、もっと広い視野で観察する必要がある。

4) 両言語の対照研究についても、より広範囲での詳しい考察が必要である。

以上の意味で、反論という言語行為については、今後解決すべき多くの問題が残されている。

博士学位論文審査結果要旨

2004年 2月 26日

学位申請者	趙 華敏	
審査委員	主査	村木 新次郎 
	副査	寺川 眞知夫 
	副査	門前 正彦 
論文題名	現代日本語の反論という言語行為に関する研究 —中国語との比較を通して—	
(要旨)	<p>この論文は、日本語における反論という言語行為について考察を加えたものであり、あわせて中国語における反論との対照にも言い及んだものである。</p> <p>第1章では、反論という言語行為をとりあげるにあたって、これまでの語用論の研究(J.L.Austin, J.R.Searle, H.P.Griceら)を中心に、ポライトネス理論(N.G.Leech, P.Brown&S.Levinsonら)と関連性理論(D.Sperber&D.Wilsonら)、さらにテキスト言語学で提示されているテキストにおける整合性と結束性の問題(M.A.K.Halliday&R.Hasanら)などをつぶさに検討し吟味している。それぞれの理論の有効性と限界や問題点にふれ、発話行為に関して、話し手だけではなく、聞き手の存在をとりこむ立場を主張する。発話の意味は、話し手聞き手の相互交渉から生み出されるものであるという視点に立ち、文ではなく、テキスト(談話)を分析単位として、複合的な言語行為である反論の実態にメスを入れた先駆的かつ野心的な論文である。その特徴は、発話行為の研究では、一般に遂行動詞というものが重視されるが、著者はあえてこれを無視し、「何かを言うことによって何かをする」というテーゼを徹底させるところにある。分析対象は、対談、映画・ドラマのシナリオ、大衆小説の会話文などであり、そうした具体的な言語活動を実証的に記述するという手がたい方法で、考察が深められている。反論の用例は、万遍なく取り上げられているかにみえるが、議会や裁判における公的な場面をはじめ、さまざまな他のジャンルにおける反論もあり、この論文で取り上げられていない反論のタイプの可能性もありうるであろう。</p> <p>第2章では、反論とはなにかを問い、具体例によって、著者が考える反論の定義を補強する。反論は、他者の言説に対する否定のうえに成り立つが、従来の文法論で説かれる形式上の否定を越えて、意味論上の否定に加え、広く語用論上の否定表現(潜在的なものを積極的にとりこむ)をとりあげることによって、多様な反論の現象をみとめる。著者の反論とする対象には、表現上、顕在化していない場合にもおよび、それを否定命題として考慮に入れるところに特徴がみとめられる。こうして、数多くの反論の実例を吟味したうえで、さまざまな側面をあわせもつ複合的な言語行為である反論の基本構造が構築され、モデル化されている。著者によれば、反論はそれを行う人の態度によって、「正面衝突回避型」と「正面衝突型」とに分かれ、切り出しの部分に注目して、どのような導入を用いるかによって、それぞれ4つのタイプに下位区分される。なお、この章の記述に、反論という言語行動の、談話行動全体の中での位置づけが提示されていない点に、多少の不満が残る。</p>	

著者は、遂行動詞や文法的な否定のレベルを超越して、話し手と聞き手の相互交渉の中で展開される、ふたりの主張する命題の齟齬を俎上にのせて、相手に異をとる際の、諸形式や諸機能を広義のコンテキストを考慮しながら分析をしてみせる。談話を成立させるコンテキストには、言語的な文脈だけでなく、非言語的な諸要素（たとえば、目的・状況・参加者など）がある。反論に見られる言語上の諸形式と非言語的な諸要素との相関関係をしめした（第3章）点は、この論文の功績の一つである。

考察の多く（第2章から第5章）は、日本語における反論についてであるが、第6章では、中国語における反論の分析がしめされ、日中両言語における反論の異同が指摘されたことは貴重である。反論という言語行為の基本的な形式においては目立った相違はないが、どのような方略が選ばれるかには大きな違いがみられるという。相対的に、日本語では、正面衝突回避型に偏るが、中国語では、正面衝突型に傾斜するようである。しかし、著者はこのような結果から、いずれが丁寧なのかという判断を下していない。円滑なコミュニケーションを行う「適切さ」こそが最重要なのであると説く。反論する際の、日中両言語での選択される形式の違いはあるものの、いずれも円滑な人間関係を確立し、それを保持するための言語行動という点では共通しているのである。コミュニケーションや人間関係を維持するための「適切さ」は、民族語をささえている文化や社会の相違に由来するものであろうという。表面に現れたものだけを絶対化するのではなく、その根底にあるものはなにかを問う著者の柔軟な姿勢がうかがわれるのである。

この論文は、反論を学問的にとりあげたものとして最初の論考かと思われる。反論という言語行動の基本構造を構築し、反論の諸形式、反論が展開されるプロセス、反論という言語行為の効力などに言及し、それに関与する諸条件を整理し、それらの相互の関係を明確にした点は、高く評価できる。単に反論という発話行為にとどまらず、他の発話行為の研究にも寄与できる要素をそなえているし、日中両言語の反論を比較し、その異同を提示していて、言語類型論にも貢献できる好論文であると判断する。

論文は、全体の構成においても確固たる形式を整えている。専門用語の使い方も妥当で、論文の鍵となる術語やさまざまな用法で使われている用語については、その都度、筆者なりの定義づけが施されている。




この論文には、欧米の研究者だけではなく、日本や中国の語用論をはじめ社会言語学などの研究成果に言及されているが、単なる紹介におわらず、また反論への単純なひきうつしでもなく、それぞれの成果を咀嚼したうえで、批判的にみずからの研究対象にとりこみ、日本語や中国語の有り様を直視して、そこから発話の中に潜んでいる法則性を導きだしている点が、この論文の優れたところである。

著者の関連領域に対する理解はおおむね確かであり、広範な知識を備えていることが随所にうかがわれる。論文は、学術論文にふさわしい文体であり、体裁上も申し分ない。

よって、本論文は、博士（日本語日本文化）（同志社女子大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認める。

試問結果の要旨

2004年 2月 26日

学位申請者	趙 華敏	
審査委員	主査	村木 新次郎 
	副査	寺川 眞知夫 
	副査	門前 正彦 

(要旨)

審査員3人は、2004年2月24日午後1時から2時40分まで、学位申請者趙華敏氏に対し、本論文に関する公開の試問を行なった。審査員の数々の質問や疑義に対して、申請者は的確な回答をした。いくつかの論点については、審査者と申請者の間で議論が展開された。言語観の相違と視点をめぐって、審査にあたった委員と申請者の間で対立する部分もあった。申請者が語用論・談話研究に関して深い理解と見識をもっていること、事例を鋭く分析する能力を備えていることが確認された。日本語の理解力、表現力はいずれも抜群に優れていた。

よって、本論文の提出者趙華敏氏が博士（日本語日本文化）（同志社女子大学）の授与に値する十分な学力を有するものと認める。